

比庵佳境の会

一痕の月 大空に輝きて さへぎるものもなき 踊りなり

比庵九十一



平安 比庵九十三



盆踊り 昭和四八年

娘明子（はるこ）の生涯 父比庵との暖かい絆

会長 清水固（比庵の孫）

1 三人家族の子供時代

比庵の芸術活動は妻鶴代と一人娘の明子によって支えられた面が大きい。妻鶴代は比庵が本格的芸術活動に入る直前（昭和一七年、比庵六〇歳）の時に亡くなったが、それまでの準備機関であった勤め人時代に、夫の健康面の不安があり経済面も苦しい状態の中でよく夫を支えた。娘明子を囲んだ三人家族の幸せを比庵は次の様に詠んでいる。

・ほのぼのと春のあけぼの生れ出でし
花のおみな児咲きに咲かなん。

（明子誕生 明治四二年）

・灯火をかこみてをればおのずから
樂しみ湧ける我家なるかな（大正六年）
・故郷の百合を味ふ三人の
小さき家族の幸多き哉



横手時代（大正3年） 比庵32歳
明子5歳

2 神戸女学院時代

大正十二年明子は神戸女学院に入学したが、比庵が東京に転勤となり、両親と離れて寄宿舎生活に入った。この間比庵から明子に送られた絵手紙が明子の心の中の宝物として



神戸女学院時代

「父の手紙は単に絵の描いてある手紙ではなく絵がものを言っている手紙でした。それは私の心を潤いあるものにしてくれました。」

後、丸餅が届く
荷物を沢山積んだ貨物列車の絵手紙の

・「丸餅」では

と
「父の誕生日」には
ご馳走の並ぶ四角いテーブルを囲む父母のスケッチに空席の座が一つ。「さみしい」

・「遠足が近い」では

遠足行列の中に一人、リュックから荷物
がはみだしそう。言葉は「腹をこわすな」と
やがて母からお菓子を一杯送ってきた。

・「試験が近い」と書いた赤鬼と小さな女学

生が綱引き。真ん中の空間に「負けるな、
しっかり」と書かれている。

・「試験が近い」という絵手紙では

胸に「試験」と書いた赤鬼と小さな女学
生が綱引き。真ん中の空間に「負けるな、
しっかり」と書かれている。

残った。残念ながらこの絵手紙は疎開時に紛失してしまったが、明子は明確に記憶しており、晩年に雑誌に寄稿（月刊絵手紙平成二一年一〇月号一〇〇歳）した。

3 戦中戦後の混乱期以降

神戸女学院卒業後明子は婿養子尚と結婚して五人の子が出来た。(筆者は二番目次男)

その後、日本は太平洋戦争に突入(昭和一六年)、母鶴代の他界(昭和一七年)、夫尚の応召(昭和一八年)、比庵の故郷岡山県に疎開(昭和二〇年)と続き、一家は激動に巻き込まれたが、明子は大黒柱となつてがんばった。父比庵が風邪で臥せっていた時に朝四時に家を出て田舎に蓐を買いに行くなど食料の少ない時の苦労は大変だったようだ。

終戦後、昭和二二年暮れに疎開先から東京に移り比庵の芸術活動は拡大していくが、身の回りの世話や来客との応答など夫や子供の世話も含めて忙しい毎日だった。昭和三〇年代以降は子供たちの独立等もあり、比庵作品展や旅行に同伴することが増えて比庵の交流の広さや作品についての知識も増えて、これが比庵没後の足跡顕彰に大いに役立った。



父と娘 深大寺歌碑の前で 昭和49年秋

比庵最晩年には、過ごした日々の思い出等を二人で色々語り合ったようだ。半世紀にわたる比庵との父娘愛について比庵没

4 比庵没後(昭和五〇年以降)の活動

昭和五〇年比庵没後明子は比庵追悼の催への協力、夫と共に比庵足跡地の訪問など務めたが、一〇年後に夫に先立たれてからは一人で比庵足跡の顕彰に努めた。

- ・ 関係誌への寄稿(窓日、麓、大日光等)
- ・ 随筆集「比庵あけくれ」作成(昭和五六年)
- ・ 清水比庵作品集「比庵百華」著作協力(昭和六三年)
- ・ 比庵作品の整備(軸装や裏張)
- ・ 比庵作品の箱書き
- ・ 美術館等に作品や遺品を多数寄贈
- ・ 絵手紙のまとめ
- ・ 川合玉堂との交換手紙の整備(軸装、額装)
- ・ 比庵展でのギャラリートーク(九七歳、百歳)

大日光の記事で、明子は父を追憶して次



色紙に自作歌を揮毫
明子 101歳

のように述べている。「色々な父の言葉を私はしみじみと味わっている。そういう父を持ったことを本当に良かったと感謝している。百ヶ日を迎えた今日になつても未だ父が「オライ」と呼ぶ声が聞こえそう、そしてコッソリと二階から姿が現れそうな気がして、朗詠の声も聞こえぬ二階を仰ぎ見るのである。」

明子は父への挽歌を次の様に詠んでいる。
明日に迫る比庵生誕百年展
行きて十年短くあらず
会場の遺作に立てば紙拵げ
筆持つ亡父が其処此処に顕つ
亡き父の書かれし「遊」額一つ
心の遊び忘るなとささやく



明子 97歳 平成18年(2006年)7月
深大寺歌碑の前で
(葬儀の際に遺影として使用)

明子は平成二三年一月満一〇二歳の天寿を



追ひ羽根 大正10年

全うしたが、葬式祭壇の遺影は明子の要望により比庵最後の歌碑(調布市深大寺)の前で撮った九七歳の写真を使った。一世に亘る明子の一生は父比庵との暖かい絆に満ち、比庵芸術を限りなく大切にしたい私たちは実感している。

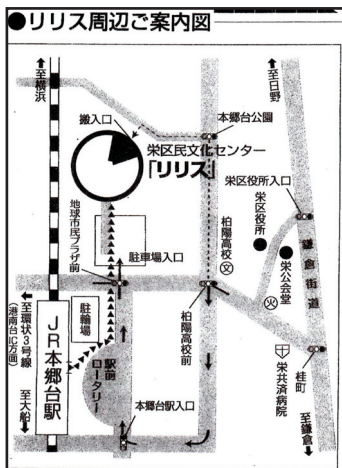
清水比庵展 九月開催のお知らせ

清水比庵の孫で比庵佳境の会会長の清水固宅がある横浜市栄区の地元で、昨春秋に近くの寺院(光明寺)で一日だけの小比庵展を開催しましたが、広い展示場で長期間開催の強い要望がありました。そこで左記の通り九月中旬に一週間開催することになりましたのでお知らせします。展示物は光明寺展では展示できなかった掛軸作品を主体とするほか、比庵が銀行員だった三十歳代(大正時代、百年程前)の絵手紙も展示します。絵手紙の文章も印刷(釈文付)して画と並べて配置いたします。都合の良い日にご来場ください。

清水比庵作品展
栄区民文化センター「リリス」
ギャラリーブ

会場 栄区民文化センター「リリス」
期間 平成二十七年 九月十五日(二十一日)
初日 十三時より
最終日 十二時まで
適時ギャラリートークあり
入場料 五百円
主催 比庵佳境の会

栄区民文化センター「リリス」
(指定管理者: 神奈川共立・JSS 共同事業体)
●交通: JR根岸線「本郷駅」下車 徒歩3分
(横浜駅より28分、大船駅より5分)
●TEL 045-896-2000
●FAX 045-896-2200
●開館時間 午前9時~午後10時



遠山記念館清水比庵展

「歿後四十年清水比庵暖かな歌人のまなざし」

平成二十七年三月二日～五月十日

会長 清水固（比庵の孫）

清水比庵展を見て

岡本 節子（会員）

遠山記念館の創設者初代日興証券社長遠山元一が比庵作品に魅了されて三十点程収集してから四三年、比庵没後四十年経った今春、関係者が希望していた清水比庵展が実現し、交通不便にも拘らず二千人弱の観客があり盛況裏に終了した。主催者の遠山記念館は特に企画の一環として、展示する作品、絵手紙、木彫盆（窓日彫）の写真を記載した図録（註参照）を作成した。

この間四月八日には雪が散らつく天候の中、有志三〇名でバスを仕立てて参加し、作品鑑賞の外に茶会と遠山邸見学を楽しんだ。詳細は本号の岡本節子様寄稿文を御覧いただきたい。

四月十九日には清水固「祖父比庵を語る」の特別講演を実施し百十名以上の観客があり、多くの方から暖かい好評を頂いた。



時ならぬ雪で花も凍る遠山記念館

第一部 老いの若さー七十歳からの発展
第二部 人間比庵ー家族愛、交流、長寿、ユーモア
第三部 絵手紙ー比庵芸術の原点

比庵展の図録は遠山記念館で販売中
左記要領で購入できる。（単価1500円）

電話 049-297-0007

メール <http://www.e-kinenkan.com>

電話かメールで申込後、代金と送料（ゆうメール代金は問合せる）を現金書留で左記に送る。

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675

遠山記念館（担当小野恵）

時ならぬ小雪さえ散らつく花冷えの四月八日、横浜からバスを仕立て、品川からアメリカからいらした清水固氏妹さんご一家も加わり、現地集合の方も合わせて総勢三十名程で遠山記念館を訪ねました。私は飛入りで参加させていただきましたが、三部構成の入念なスケジュールで充実した一日を過ごさせていただきました。

到着後先ず比庵展鑑賞。

比庵米寿記念作品集「野水帖（やすいちよう）」を目にし、比庵作品に傾倒した日興証券創立者遠山元一氏が収集した作品に清水家所蔵の作品を加えて五十点程の展示でした。私は墨の美術館開館記念として展示された「比庵富士」に初めて接し魅了された者です。

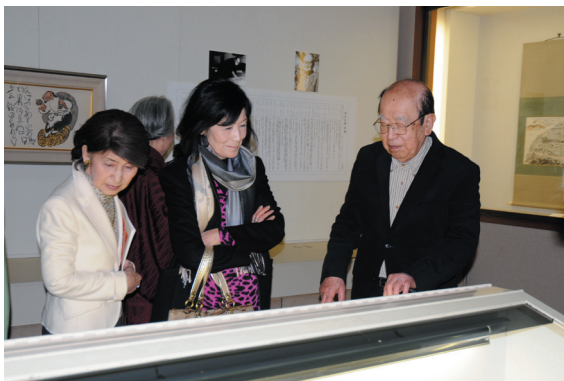
ですが、今回も見る者を暖かく包みこむ作品群が並んでいました。四十歳台に書かれた母を詠んだ歌十首の屏風の端正な佇まい、同時に展示されている絵手紙の多様さ、晩年の衰えを知らないエネルギーに溢れる歌・書・画三位一体の豊かな世界。そこには自らの画を新文人画と称し、歌も画もいいものでなくてはならないと精進を続け、生涯にわたって自らの世界を極めていった研鑽の足跡をたどることができました。

第二部は清水氏の友人安川博氏ご夫妻主催

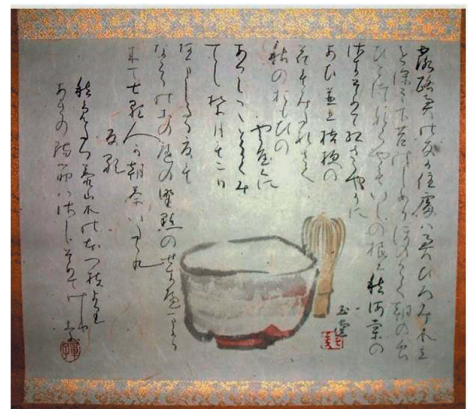
による、本格的茶室でのお茶会。茶掛けとして川合玉堂の画に比庵の妹で歌人の岡本章子（ゆきこ）が画賛した「茶事」の掛軸が用意されました。狭い空間ですの三班にわかれて頂戴しましたが殆どが初体験で、特にアメリカからいらした清水ファミリーの方々も堪能されていました。

最後は遠山邸見学。埼玉ののどかな田園風景の一面に構える遠山邸は、八十年前に建てられ、一度も手を入れたことがないということですが、広大な敷地に渡り廊下で繋がれた重厚な伝統的日本人建築で、全国各地の銘木と匠の技、また当時としては珍しい近代設備も取り入れた貴重な遺産に浸ることができました。そして所々の床の間に飾られた比庵の軸が更に和ませてくれました。

今回、清水ファミリーに一緒にさせていただき、脈々と受け継がれる比庵敬慕の念、そして晩年の比庵さんを囲むご家族の存在が比庵作品の原動力となったことを思いました。清水氏が私の余生は「比庵を拾う余生」とおっしゃっていましたが、その余禄に与ることができた幸せを実感できた一日でした。



左から妹尾汎子さん、ワーデン充子さん、清水 固氏（どちらも固氏の妹）



茶事 画 川合玉堂 歌 岡本章子（比庵の妹）



席主を務める安川 博氏（宗博さん）とお点前をする奥様（宗洋さん）

露路奥の 友が住処は 奥ひろみ 木立を深み 下苔のしめりほのけく 朝のむし ひとつなぎある いしの根に秋海棠も 咲きそめて 紅さ膜小篠さやかに あひ並び桔梗の花も 乱れさく 秋のすがたの やうやくに 暑し暑しと にくみてし 葉月も二日 あましたる夏もなごりの この庭の 野点の席へ まかりきて七歌人が 朝茶いだたく

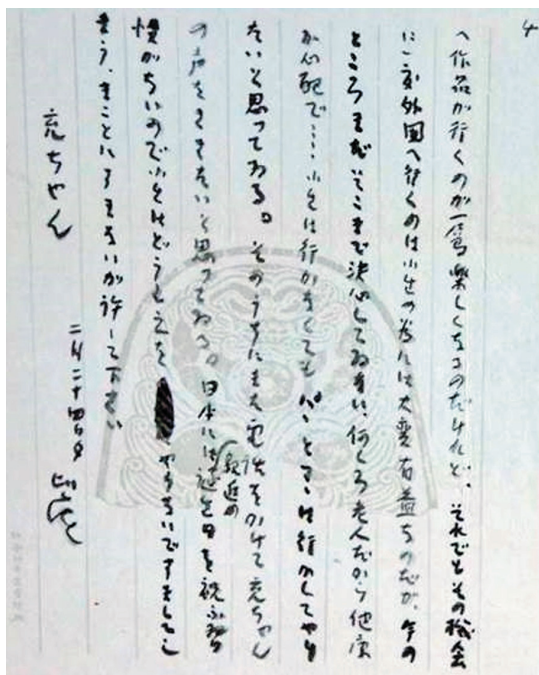
反歌 秋めたつ 泰山木の ほつ枝よりあさの陽筋は さしそめてけり

比庵おじいちゃんの夢

ワーデン充子（ミツコ 比庵の末の孫）

私には小さな大切な宝があります。それは祖父比庵が私にくれた最後の手紙です。それを受け取った当時私はすでに此処カリフォルニアに住んでいました。祖父とはたまには手紙のやりとりはしていましたが、私は子育てで中々仕事もしていたのでなかなか思うようにゆっくりと手紙を書く余裕がありませんでした。何とか時間を見つけて私は二月八日の比庵の誕生日のプレゼントとしてひざ掛けを編み送ったのですが、そのお礼の手紙でした。久しぶりに見た祖父の字をとてうれしくまた懐かしく思ったこと今でも覚えていています。読んでいくうちにちよつとおちやめな嬉しそうな祖父の顔が目浮かぶ文章が目に入ってきたのです。

：まだ最終的に決まったわけではないのでママ以外には誰にも言っていないのだけれど日本文化庁で自分の作品を海外に紹介する計画



ワーデン充子に宛てた比庵の手紙（一部）

があつて、いま取り調べ中である。希望者は非常に多いが文化庁はとも比庵作品が目についていて、たぶん来年実現するだろう。充子たちは6月に帰国するらしいから、ゆつくりその相談をしよう。自分はまだ九三歳の老人だから海外に行つて見たいが、だめなら少なくともパパとママを行かせてやりたい。云々：

私は声をあげて喜び六月を待ち遠しく思いました。昭和五〇年二月末のことでした。残念ながらこの夢は実現できませんでした。祖父は五月ごろから体調を崩し夏に家族で帰国したときはすでに病院でした。それから三か月して比庵は、多くの人に愛されて生き抜いた人生を閉じたのです。

四〇年後の今、ふとしたことから笠岡の画商T氏から三〇年以上も岡山県内に眠っていたらしい比庵赤富士を手に入れる事ができ、待ちに待ったそれははるばる海を越えて私のもとにやってきました。大切に丁寧にT氏の愛のこもった包装を解きながら、私はこれこそ比庵の魂が一緒やってきましたと確信したのです。「お祖父ちゃん、やつと実現したわね！本当にはるばるよくいらしゃいました。」私は思わずその口に出してしまいました。他にも多く大好きな比庵作品はあります。でもなぜこの赤富士は私に話しかけてくれているように思えて仕方がありません。それはきつとはるばる飛行機にのつて日本から私のもとにやってきましたからかもしれせん。

いうまでもなくその赤富士は私と毎

日顔を合わせて私を癒してくれ、家族や友人たちのお気に入りになっています。そして、いつの日か此処ロスアンゼルスで小さくとも清水比庵を紹介できる日が来るのが私の夢になりました。比庵の夢は孫の私に移つてしまったようです。

追記 清水固（ワーデン充子の兄）

比庵には五人の孫がおり、末の孫娘が充子で比庵が最も可愛がっていた。というのは比庵が日光町長を退任して千葉市川市の我が家に帰った時に生まれ、妻鶴代が急逝して悲嘆にくれたとき三歳の可愛い盛りであつた。傷心の比庵は充子をハンモックに寝かせたり、炬燵で絵本を読んで聞かせたりしていた。後に充子が米国に渡つてからは帰国を楽しみにしていた。昭和四一年皇居の歌会始の召人になった時、娘の明子が服装の新調を勧めてもOKしなかったのに、たまたま帰国していた孫の充子の「靴は私達の方で、モーニングはおじいちゃんの方で新調することに決めます」に一言もなく承諾している。充子宛のこの手紙はかつて比庵展に展示したが、今は額装してカリフォルニアの充子宅にある

横浜市青葉区に「墨の美術館」完成

横浜市青葉区の住宅街に小さな墨の美術館が完成しました。日本の書画歌に関する展示や活動を通じてより良く日本文化を理解し合い、広く未来に伝播できればと考えています。更に海外との文化交流を推進し互いに異文化を理解しあえる一助となればと願っています。

常設は清水比庵の作品と書人・濱崎道子の作品となります。年2〜3回「墨の美術館」企画の特別展を開催予定です。HP等を通じてご案内させていただきますので宜しく願います。

墨の美術館 濱崎道子

会費納入のお願い

27年度の会費を下記に納入されますようお願いいたします。

1口 1000円（複数口歓迎）
三井住友銀行鶴見支店普通 7061558
名義・・・クボタノブユキ

比庵佳境の会

会長 清水 固（清水比庵の孫）
〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-5-18
TEL&FAX 045-893-8932
URL: <http://www.hat.hi-ho.ne.jp/katashi-shimizu/>
事務局：村上 信行
〒247-0022 横浜市栄区庄戸 4-4-2

追記

九月八日（火）から一二日（日）まで東京銀座座鳩居堂（03-3574-0058）の四階画廊で濱崎道子書展を開催します。十一時から十九時まで、最終日は十七時まで



階段床を設えた茶室



水をたたえた庭園部



交通：東急田園都市線「青葉台」下車 駅前一番バス乗り場で乗車「桜台第二公園前」下車 徒歩1分

〒227-0047 横浜市青葉区みたび 11-13
TEL: 090-3439-5014
Eメール: info@michinokai.com
HP: www.michinokai.com